

国際協力研究会 議事録

日時 : 2003年7月29日(火) 18時40分~20時40分

テーマ: アフリカ都市スラムにおける居住環境改善プロジェクト: ザンビア国
ルサカ市での事例

報告者: 朝倉勇氏(日本工営株式会社開発計画部 専門部長)

会場: 日本工営3階B会議室(千代田区麹町5-4) 国際建設技術協会の向いのビル

出席者: 海老塚、矢野、阪東、瀬田、塩月、松村、森川、菅、川添、富安、志賀、山下、
大澤、兎内、小林、大坪、相羽、坂田、清水、森岡、島津、齊藤、山本、小南、吉田、位
田、居林、藤稿、北村(計29人)

I. 報告

- ・ ザンビア国ルサカ市見計画居住区住環境改善計画調査概要
- ・ 調査目的、工程、未計画居住区の選定、方針、効果、教訓、提言(アフターケア)等。

II. 質疑応答

Q. 現在、無償援助が同地域で行われているが、現状はどうなっているか。

A. 報告した調査において短期プロジェクトを提言し、現在提案に従って無償援助が行われている。

パイロット事業の教訓

- ・ 給水と合わせてゴミ処理など衛生管理等と一緒に進めていく必要がある。
- ・ 給水場での料金徴収を現場で現金で行っているが盗難恐喝等の危険がある。チケット制などを取り入れ料金収集所としてコミュニティセンターなども作るべき。
- ・ 道路改善事業により交通量が予想外に増え、道路沿いの住民から苦情がでた。
- ・ 所得向上事業は返済率が上がらなかった。

Q. 無償援助の予算額はいくらくらいか。

A. これまでは有償給水事業で何十億円単位だったのが何億円単位に節減可能となろう。受益者は7万人程度。今回は高架タンク等に安価なものを用い、老朽化し壊れても住民が直接修繕できる程度のものを扱ったため。

Q. 外部からの援助はインフラ建設系が多くなる。能力開発向上等のための工夫はどのようになされたか。

A. グローバルリンク等からの専門家のアイデアも取り入れ効果を上げた。住民の本音ではとにかく「水」を必要としていた。結果として衛生教育等なされ住民能力には向上がみられた。

Q. トイレの原価がUS \$ 300 というが、一世帯では費用がかかりすぎるのではないか。コストが高いため住民間で普及させるのは難しいのではないか。

A. 6世帯に2基ぐらいで使われる。スラムといっても全てが低所得者という分けではない。問題は最貧困者をどうするかということであるが、その答えは出ていない。社会福祉政策の範疇になろう。

Q. 高架タンクの基礎として用いた鉄骨資材は費用が高い。なぜ用いたのか。

A. 他のNGOがすでに鉄骨資材を用いた活動をしているため、それより劣るものである

と、住民から不満がでてしまう。住民側の率直なニーズとしてよりいい物を作ってほしいというものがある。

Q . 住民参加というが、実際どの程度建設作業に加わったか。

A . 住民側は日当が出るため全て自分達で建設したいと要求するが、実際は技術も未発達なため難しい。結局塀だけを住民が作り、学校建設はN G Oなどからの技術者、大工が行った。有償で住民にやってもらう場合も住民参加の効果はある。働ける時間や土地柄等にもよる。

Q . 事業対象となる未計画居住区の選定はコミュニティの参加能力、市の保健局組織整備状況、他ドナーの参入状況などの評価をもとに判断したとあるが、主観的な基準をどうやって判断するのか。最も援助を必要とする地域が省かれる危険はないか。他ドナーが多い所で事業を行っているが、他ドナーが入っていない所で行う方が効果的ではないか。

A . ヒアリング調査による評価は適切である。ドナー間の協調を図ることも今回のパイロットプロジェクトの目的であったことから他ドナーの多い地域を選定した。しかしながら、実際には他ドナーとの進捗速度の違いもあり難しい面が多かった。

等。

(文責 : 矢野麻美子)